

# だんがんつ、紅鮭劇 団！【NG特典】

時雨才才力ミ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『これが僕たちの真実だ!』

信じたいものを信じた結果。

本編がもし育成計画時空の皆がやつた動画配信だつたらというIF。

そのNGを纏めた舞台裏のお話。

一ヶ月経つたしいいよね。あと一部のキャラのせいで下ネタ注意だよ。

「コロシア新学期計画ルール」

ルールその1

コロシア新学期では自由気ままに行動しましよう。どちら側になるかはあなたの

考え方次第です。

ルールその2

お互いの思惑を深く詮索してはいけません。行動を起こした人の邪魔はあまりしないようにしましょう。

ルールその3

黒幕を知っているのは黒幕と運営側だけです。参加者は互いに推理しながら突き進みましょう。

ルールその4

なにか行動を起こす際には運営に相談しましょう。OKサインが出たなら行動にしてください

ルールその5

撮り直しは4回までです。現実的に可能なトリックを上手に使つてコロシアイ  
(偽) を盛り上げましょう

ルールその6

動画撮影には新世界プログラム改が使用されます。コロシアイの際に人体に影響が出る範囲の痛覚判定が出そうになつた場合、現実の体との感覚とは直ちに切断されます。

ルールその7

ただし、プログラム世界でも基本的に痛み判定が行われるような状態にしてはいけません。人をなるべく傷つけない偽の凶器や安全措置などを用意するようにしてください。安全措置を作る場合、運営に相談して追加してもらつてください

ルールその8

やりたいことがあまりにも過激であつた場合、一部をCG処理とします。おしおきは基本的に途中退場もしくはCG処理です。

各自、自身のおしおき案を提出してください。それを元に運営側と被害者が協力して作ります

ルールその9

偽の凶器で代用できるところを無視し、本当にコロシアイを起こそうとした場合、直ちに全員のお祓いが実施されます

ルールその10

この企画は江ノ島盾子、苗木誠、不二咲千尋、日向創、Ai七海千秋が厳重に監視しています

【技術提供】

江ノ島盾子

不二咲千尋

左右田和一

月光ヶ原美彩

入間美兎

カムクライズル

【医療班】

罪木蜜柑

# 目 次

はじめはじめ……と、思うよ？

1

なんで図書室なんかに行つたんすかね？

11

はじまりはじまり……と、思うよ？

【コロシア新学期計画ルール】

ルールその1

コロシア新学期では自由気ままに行動しましょう。どちら側になるかはあなたの考え方次第です。

ルールその2

お互いの思惑を深く詮索してはいけません。行動を起こした人の邪魔はあまりしないようにしましょう。

ルールその3

黒幕とオチを知っているのは黒幕と運営側だけです。参加者は互いに推理しながら突き進みましょう。

ルールその4

なにか行動を起こす際には運営に相談しましょう。OKサインが出たなら行動してください

1 はじまりはじまり……と、思うよ？

## ルールその5

撮り直しは4回までです。現実的に可能なトリックを上手に使ってコロシア  
イ（偽）を盛り上げましょう

## ルールその6

動画撮影には新世界プログラム改が使用されます。コロシアの際に人体に影響が  
出る範囲の痛覚判定が出そうになつた場合、現実の体との感覚とは直ちに切断されま  
す。

## ルールその7

ただし、プログラム世界でも基本的に痛み判定が行われるような状態にしてはいけま  
せん。人となるべく傷つけない偽の凶器や安全措置などを用意するようにしてください  
い。安全措置を作る場合、運営に相談して追加してもらつてください

## ルールその8

やりたいことがあまりにも過激であつた場合、一部をCG処理とします。おしおきは  
基本的に途中退場もしくはCG処理です。

各自、自身のおしおき案を提出してください。それを元に運営側と被害者が協力して  
作ります

## ルールその9

### 3 はじまりはじまり……と、思うよ?

偽の凶器で代用できるところを無視し、本当にコロシアイを起こそうとした場合、直ちに全員のお祓いが実施されます

ルールその10

この企画は江ノ島盾子、苗木誠、不二咲千尋、日向創、A・i七海千秋が厳重に監視しています

#### 【技術提供】

江ノ島盾子

不二咲千尋

月光ヶ原美彩

入間美兎

カムクライズル

#### 【医療班】

罪木蜜柑

以上を持つて楽しく動画を作りましょう!

#### 【一章事件前・二つ目の動機発表時】

「はーい、カツトカツト～！」

全員の前でモノクマが手をブンブンと振り回しながら言つた。  
すると「2日後の夜時間がタイムアップ」だと知らされて顔を強張らせていた  
面々が次々と表情を和らげてそれぞれが行動し始める。

「おー、おつかれだぜ」

「おつかれさま～」

百田、赤松とそれぞれが和やかな挨拶を交わす中、にししと笑つた王馬が両手を頭の  
後ろに回して「事件なら真つ平ゴメンだよ！ オレは部屋に戻らせてもらうね！」  
と大袈裟な身振り手振りで言い出した。

「ああ、さつきの発言つてやつぱり死亡フラグのつもりだつたんだ？」

彼の言葉に真っ先に反応したのは、その手の話題に詳しい白銀だ。

彼女が言及しているのは、演技中王馬が言つた「部屋でじっくり考え方をする」  
云々の台詞についてだろう。

「どーだ オレ様の完璧な演技は！ そこの非モテ童貞共よりも！ メス豚共よりもつ  
！ サイツコーにぶつ決まつてただろ！」

「そうだね、完全にビビつててビチ子ちゃんがニワトリちゃんになつてたね？ すぐに  
食べられようとするなんてさすがビチ子ちゃんだよ！ その下品さが！」

## 5 はじまりはじまり……と、思うよ?

「ひ、ひうう、た、食べられ……あ、いいかもお……」

ヨダレを垂らしながら顔を真っ赤にした入間は放心状態に入り、ひとしきり彼女をいじり倒した王馬が満足したように笑う。

「それよりも、劇中でもいつものグループが固まつてしまつていますがいいのでしようか?」

「いいんだよー。仲良し同士でいるのは良いことだつて神様も言つてるからー」

「そうですよ! でないとやつてられません! 私はどうしても男死とセットになるのは無理ですしちゃん!」

「んあー? アンジーと転子と一緒にいたいから、普段通りで良いと思うぞ。そうじやろ?」

キーボが思案顔で言うが、次々と女子からの意見で押しつぶされて行く。しまいには

「これだから血も涙もないロボットはー」と言い出す王馬と言い争いを始め、毎度の

ごとくのロボット差別漫才を全員の前で繰り広げることとなるのだつた。

「えつと、こんな感じでいいよね。それぞれ、自分だつたらこうするつて行動方針になつてるんだもんね?」

「うん、赤松さんはいつも通りのキミでいいと思う」

赤松と最原は和やかに会話に興じ、「さつさと帰ろうよ……」と春川がため息を吐

く。百田が構いに行つたが、満更でもなさそうに顔をそつと染めていた。

この2グループを微笑ましげに皆が見つめるが、両方ともそれにはさっぱり気づいていない。流石である。

「でも、すごいね。これが夢だなんて分からぬよ！」

「夢じやあねーだろ。しかし、あんたにはちと分かりづらいか……？」

「蝴蝶の夢なんて話もあるから、ある意味間違いではないよネ」

彼ら、彼女らが現在いる世界は所謂ゲームの世界である。

しかし、全員眠つてゐる状態でゲームの中に接続してゐるので夢の世界と言つても間違ひではない。どちらと取るかは各自の解釈次第である。

「獄原君は自分の分かりやすいように納得しておけばいいと思うわ。その方がやりやすいものね」

東条が上記のことをフォローに入り、微笑む。

その笑みはメイドとしてよりもやはり母親のような、と受け取つてもおかしくないほど慈愛に満ちていた。

そんなことを一度言えば彼女を怒らせてしまうことは明白だが、それは全員共通の思ひだろう。

「ゴン太の夢なのに虫さんがいないのは少し悲しいけど…… 皆と一緒にいくらでも遊

べるのは楽しいね!」

「まったくゴン太は単純だな~」

獄原の笑顔に絆されたのか、王馬が嬉しそうに言う。  
それを見ていた白銀が小さな声で「二人とも尊い…… 黒髪尊いよお」と呟いて  
いるが、残念ながら誰にもその言葉は届いていない。

と、全員がひとしきり発言し終わつたときに彼らの視界がブウン、とブレたかと思う  
と目の前には明るい外跳ね髪の少女が姿を現していた。とあるゲームのデザインが施  
されたピン留めが特徴的な少女…… 共同研究で本人の性格を元に、不二咲千尋が作成  
したAIの七海千秋である。

「みんな…… おつかれさま、だよ?」

彼女が現れると全員から「おつかれさま」という言葉がかかる。

彼女とある単語を話すことが現実へと帰還するためのキーとなつてゐるからだ。

「えっと、パスワードは分かつてるよね?」

「質問されたら自分の名前を言えばいいんだよね?」

「…… うん、そうだよ。それじゃあ、みんなで帰ろつか」

次々ログアウトして行く中、最原と赤松は最後まで残つて笑顔で「七海さん、いつも  
ありがとう」と伝える。

それにA.Iの七海は嬉しそうに微笑んで「またいろんなことを教えてね」と首を傾げながら言つた。

そして質問をして、答えた2人に向かつて手を振る。

「さて、私も日向くんのどこに行かないと」

一仕事終えて眩いた彼女は、小さな粒子を纏いながら表で待つ日向の電子生徒手帳へとワープしていった。

さて、現実世界ではそれぞれが挨拶しながら普段の学園生活に戻つて行つたのだが、時間差で舞い戻つて来た人物が2人いた。

「あ、江ノ島さん。私行動してみようと思うんだ。だからおしおき案とトリック提出しておくれ」

そのうちの1人は赤松である。

彼女の手から渡されたのは楽譜とCD。それにおしおきの流れを書いた書類である。

江ノ島はそれを受け取つて「あんた自分からこんなエグいの選ぶの?」とドン引きしているが、彼女は「やるなら徹底的にやらないとね!」と無駄に気合を入れている。

「あんたよくやるわね……最原とはいの?」

「うーん、多分なにも知らない私だつたらこうすると思うからさ……それに、最原くん

の活躍をちゃんと全部見ていたいし……」

「あー絶望的…… 絶望的に砂糖を吐き出してしまいそうです…… リア充爆発していく  
ださい」

「えっと、OKもらつたつてことでいいのかな?」

「いいから、いいからさつさと帰んなさい」

「はーい」

次に江ノ島の元へやつて来たのは長い髪と口元を隠したマスクが特徴的な真宮寺で  
ある。

「あー、あんただもんねー」

「なんで納得してるのがナ?」

おしおき案を渡されて江ノ島が早速新たに書き込みを入れて行くが、彼は気にせずに  
そのまま去ろうとする。

「で、いつくらいに実行すんの?」

「タイムリミットギリギリかナ。初回特典があるし十分動く理由になるよネ」

「ふーん、分かつたわ」

恐らく狙うのは東条だろう。

そう当たりをつけて江ノ島はモニター室の椅子に思い切り深く座り込む。やたらと

軽い彼女の体重でもギシリと椅子が音を立てた。

「あー、ルールに入れといで正解ねー。あいつ、〃本当に殺したらお祓い〃のルールなかつたらなにがなんでも殺つてそうだし、苗木きゅんつたらホント皆のこと分かつてるよねー」

ボヤいた彼女の口元には笑みが刻まれていた。

なんで図書室なんかに行つたんすかね？

【 Take 1 】

「じゃあ、僕はもう少しここでやることがあるから……」

「うん、分かったよ。じゃあまた後でね」

その日の朝、地下の図書室ではモノクマのスペアのことや首謀者についてを赤松と最原が話していた。

仕掛け扉の奥にあるスペア製造装置の存在。そして、それを利用する身内に潜んだ首謀者の影…… それらを推理で繋いでいった二人は、ひとまずその場で解散することにしたようだ。

( なんだか…… 結果から逆算して推理するのって難しいんだな。僕らの中に首謀者が混じっているのは知っているけど、それに繋げるための材料はこれしかない…… この状態じや、信じる演技をしてくれるのは半数程度しかいないだろうし…… )

百田、獄原、天海、星、東条…… それに王馬。

己の言葉に一定の信用を置いてきそうな、冷静な面々を最原は思い浮かべる。

逆に入間のような精神的に弱い者は信用されるのが難しく、夢野や茶柱は現実では仲が良いので信用してくれそうだが、初対面という設定であるために現状では信用を取れなくなっているのだ。

(赤松さんがいてくれてよかつた。心強いし、それに……ちよつとは頼りになるところも見てほしいからね……)

最原が脚立を移動させながら嬉しそうにしているのとは裏腹に、そのとき赤松は去り際に考え事をしていた。

(最原くん大丈夫かな？なんか、どんどん死亡フラグってやつが立つていつてる気がする……よーし、最原くんは私が守るよ！)

頼りに思っている様子は微塵も感じられなかつた。



「なんで俺だけこんなもんがあるんですかね……」

### 13 なんで図書室なんかに行つたんすかね?

天海は最初の自由時間となつたとき、地下の図書室を訪れていた。

「はあ……うつかり最原君ともすれ違いましたし……俺、ツイてないんすかね?」

地下へ訪れる際に道は一本だけなので、一人でこの場所に来るのはなかなか骨が折れるのだつた。

赤松と別れた最原とすれ違つてしまつたことは運が悪かつたとしか言えないだろう。

「この図書室の先になんか部屋があるんすよね……」

彼は“生存者特典”であるモノパツドを手に、暫く図書室内を散策することにしたようだ。

「俺自身が望んだ状況つて……まあそんなんすけど、そうじやないですよね?」

ぶつぶつと独り言を呟きながら図書室内を歩き回り、天海は首を傾げる。

「あれ、確かここつすよね。本が積まれてない本棚……」

近くの脚立に目を移してからさつと本棚の隙間に手を入れ、仕掛け扉を起動させる  
……  
が。

「あいたっ!? うわっ、ぶぐつ!」

バサバサバサ……

前日の夜までには確かになかつた大量の本が天海の脳天目掛けて降つてきたのだつた。

「ちよつ、待つ、ぶつ!？」

積み上げられた本の量は並ではない。全てが落ちた頃には天海はその場で倒れ込み、大量の本に埋まってしまった。

「天海くーん」

と、そこに自由行動で赤松がやつてきたのだが…… どうやら彼には気づいていない様子である。

「あれ、いないのかな…… まあいいや。メダルあるかな?」

全員発信器を所持しているので現在地はモノパッドに反映されている。そのため天海と過ごそうと思っていた赤松が図書室に来たのだが、彼女はどうやら、ギリギリですれ違つたのだと思つていいようだ。

おもむろに腕を回すとその辺に積んであつた本を崩して行く。そして本の中に葉ようろしく挟まれたメダルを回収している。手馴れている様子から察するに一人のときはずつとこうしているのかもしれない。

( ちよつ、こつち来ないでほしいっす…… さすがにこんな間抜けな場面見られたくないですよ)

そして、沈黙を貫いている天海の願いは虚しく無視され、赤松が彼の上に積み上がった本を崩し始めた。

バラバラと本が滑り落ちていき、次第に彼の姿があらわになつてくると「ええっ!?」  
という赤松の大きな悲鳴が響いた。

「はははっ、そつとしといてくれないっすか?」

「あ、天海くん!?!」

彼女がより一層大きく声をあげると、すぐに廊下からドタドタと足音が聞こえてきた。

「どうしたの赤松さん!」

「どうしました!なにがありましたか!?!」

彼女の悲鳴を聞きつけて来たのか、隣に位置するゲーム室方面から最原とキーボが  
やつて来る。そして赤松と同じように本に埋まつた天海を発見するとポカン……と  
した表情で凍りついた。

その場に“ピンポンパンボーン♪”と呑気な音が響き渡る。

赤松、最原、キーボで発見したのは三人だが……

『マヌケが発見されました!至急図書室へお集まりください! うふふふふ、笑  
い者第一被害者決定だねー! ぶひやひやひやひや!』

沈黙が支配する図書室で、放送を終えてから第一声を発したのは……最原だつた。  
「それは違うよ! 仕掛け本棚の上に本を置いたのは僕だから、アナウンスが鳴るはず

ない！ これは殺人じやないはずだ！ …… そ、そのはずだよね？」

「マヌケ発見アナウンスでしたね…… あんなのもやるんですか、これは気をつけなければ」

「キ、キーボくん空氣読んで！」

「…… なんで俺、図書室なんかに来ちゃつたんすかね？」

このあと滅茶苦茶爆笑された。